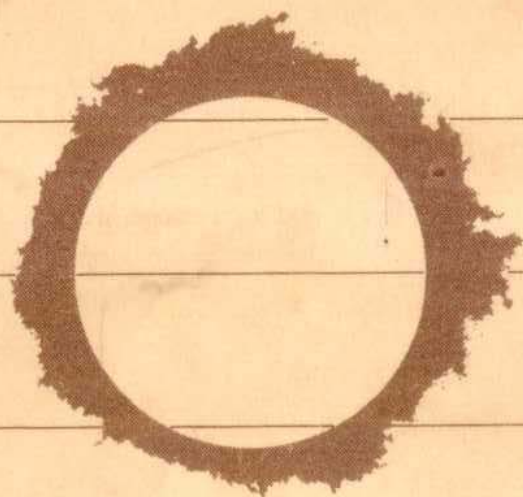


山岳展望

深田久弥



朝日新聞社

深田久弥（ふかだ きゅうや）

1903（明治36）年、石川県に生まれる。

東大在学中から改造社編集部所属、のち文筆生活に入る。登山家として、数多くの山岳紀行、旅行記を世に送り続け、1968（昭和43）年、日本山岳会副会長に就任。

ヒマラヤ関係文献を大量に蒐集し、それらをもとに、ヒマラヤ紹介に情熱を燃やした。

1971（昭和46）年、茅ヶ岳登山中に脳卒中のため急死。

代表作に『日本百名山』『ヒマラヤの高峰』など。

山岳展望

昭和57年9月20日 第1刷発行

定価 380 円

著 者 深田久弥

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© SHINTARO FUKADA 1982 Printed in Japan
0195-260873-0042

山 岳 展 望

深 田 久 弥

朝日新聞社

目次

乗鞍岳スキー行	9
鹿沢だより	17
富士七合目まで	21
山岳展望	27
鹿島槍岳	33
山峡の湯	39
飛驒白川郷	44
巻機山	48
『万葉集』の山の歌	57
会津駒ヶ岳	69
大津岐峠を越えて銀山平へ	79
天幕生活の一日	88

木曾駒ヶ岳 92

霧ヶ峰の一夏 101

蓼科山 110

蔵王と五色 116

光 岳 121

八甲田と十和田 140

南部恐山 153

*

春の山 161

大河原峠 171

歳末の雪の旅 181

六月の尾瀬 188

ピヤシリ山 192

氷雪の富士山 199

木曾山脈縦走 217

信濃追分 234

風景の鑑賞 247

南アルプスの一角 251

山鬼深田久弥（今日出海） 261

山岳展望

乗鞍岳スキー行

早く滑りたくて仕様がな。手近い所に雪が降るまで待つて居れぬ。どこかへ行つて一滑りして来ないことには気がおちつかぬ。今頃滑れる所と言つたらどこだろう。やはり北アルプスだ。よし、一つ乗鞍^{のりくら}へ行こう。あそこならもう充分に滑れるだろう……

十二月になると、僕の頭はスキーの空想でいっぱいになる。散歩に出て夕方肌寒い風の中を戻つてくると、差し迫つた夜の仕事なぞそつちのけで、しきりにスキーのことばかり思い浮かぶ。

乗鞍に行くことに決めて友達を誘いあつたが、誰も皆都合が悪く、いたずらに日が延びるのに気がせいて、よしそれなら一人でも出かけようと張り切つてゐるところへ、やはり張り切つた額^{ぬか}田敏さんが一緒に行つて下さることになった。そこで二人で、乗鞍通の石原巖君を口説^{くど}き落とし、三人で新宿をたつたのは十二月十五日の夜であつた。

早朝松本に降りて、直ぐ駅前^すの自動車を捕えて大野川まで命じる。車は人通りの少ない朝の村道を、時には六十キロ以上のスピードを出して疾馳^{しうち}、たちまちの間に島々^{しましま}まで来てしまふ。いつ

来ても島々という村は懐かしい。ここまで来て始めて、ああ山へ来たな、という感じが起きるところだ。

島々から先は、道の片側が梓川あずさの崖つぷちになるので、無闇むやみなスピードも出せない。車に揺られながら、三人とも夜汽車の寝不足でウトウトとする。せっかくなのでいい気持ちに眠りかけたところを、もう大野川に着いてしまった。松本から一時間ちよつとしかかからなかった。

福島屋の炉ばたへ上がりこんで、まず雪の消息を尋ねる。十日ほど前に降ったきりで、その後毎日降りそうで降らないという、あんまり香かんばしくない返事だ。「でも去年もちょうど今夜から降り出したんだから……」と宿の人は慰め顔に言う。

大野川の部落は傾斜のある土地に散らばっている。壮大な自然の中に、出来るだけその怒りに逆らわないようにと、つつましく家の立っている、いかにも山村らしい風景のところだ。後架に跨またがって窓から眼をやると、外は直ぐ深い谷をなして前川まえが流れ、向こう側の山には荒々しくガレが崩れ落ちている。さすがに景色は胸けしきのすくように大きい。排泄物は遠い音を立てて深い所へ落ちて行く。まるで高い物見台で用を足しているような構造におのずからなっている。

炉ばたで一とき駄弁だべってから腰をあげた。冷泉小屋れいせんから上でなければスキーを穿はけそうもないという話なので、人夫を一人頼んでスキーや重たいものを担かついで貰い、僕等は背を軽くして、番所ばんしよ原にかかる坂を登って行った。

番所原に出たが曇っていて乗鞍岳は見えなかった。あついで上著うわぎをぬいで歩く。幅二間けんもありそうな大道が原を貫いて真っ直ぐにつけられている。この夏作ったのだそうで、この分だと遠

からず鈴蘭小屋まで自動車を通いそうだ。だが何か周囲の景色にそぐわない、新開地みたいな道路である。野趣溢れた番所原も、こんな大道を通されると、一割がた感じが悪くなる。

鈴蘭小屋に着く。石原君と見知りあいの小屋の家族が総出で歓迎してくれる。何しろ石原君は冬の乗鞍だけでも五度も来たというのだから、乗鞍を守る人たちとは皆親戚のような親しさだ。ゆっくり休んで昼飯代わりのパンを食って、また出かける。

鈴蘭から夏道を辿って森林帯の中へはいった頃、やっと雪の上を踏むようになった。いい粉雪だが、所どころにまだ木の根が現れているくらい雪が浅い。歩いてゆく方が楽なのでそのまま冷泉小屋までスキーをつけずに行った。このあたりの針葉樹はみな伸び伸びと、思う存分大きくなっているのが見事だった。

冷泉小屋の前で一人の青年がスキーの練習をやっている。近づく toward 向こうから挨拶された。見覚えのある顔だと思ふ間もなく直ぐ思い出した。いつか菅平からの帰り、馬櫓で一緒になった美術学校の山川勇一郎君だ。学生さんが一人一週間も前から登って自炊しています、と下の宿で聞いたが、それは山川君だったのだ。

眼が慣れないので暗い、奥行きの深い、小屋の囲炉裏へ行って一休みする。隅の台所のところに豊富な水が落ちてゐる。厳冬になつても決して凍ることがないそうで、これが冷泉の名の謂われたそうだ。

ともかく早く滑ってみたくて堪らないので、スキーをつけて小屋から森林帯の中の道を登ってみた。かなり登ってアザラシを剥ぎ、さていよいよこの季節最初の滑降だぞ、と心をときめかす。

こんな喜びはあくせくした地上の生活にはそうたびたびあるものではない。

だがこの喜びを充分満足させてくれるほど、コンディションは良くなかった。何しろ雪が少なく、登ってきた森の中の道を滑るより他なく、それも全制動も出来ないくらいの狭さで曲がり曲がっているの、高等技術を知らない僕にはかなり苦手な滑降だった。でも一年ぶりなのにコツは忘れてはいないぞ、と自分を慰め励まして小屋まで滑って帰った。

夕食の膳には、石原君の「顔」でお酒がついてきた。いい気持に酔って、熱い炬燵に足をさし延べ、二階の一室にグッスリ眠った。

翌朝眼がさめると、窓ガラスが朝日で薄ら赤く染まっている。飛び起きて外を覗くと、一点の雲なき快晴だ。「上天気だぞー」と叫ぶと二人も夜具をはねのけて窓へ来た。眼の下は見渡す限り一面の雲海だ。遙か向こうに浅間山が頭だけ浮かべている。その右に、蓼科、八ヶ岳の峰々が、小さな島のようにやはり頭だけ現している。額田さんは直ぐ写真機を持って飛び出した。石原君は「しまったー大けえ大けえ」と、さも大けえ損をしたように、こんな快晴に朝寝したことを残念がっている。

匆々に朝めしを済まして直ぐ登り始めた。昨日登ったシュプールも、昨夜ほどよく降った雪で綺麗に消されている。森林帯を抜けて、岳樺がまばらに生えている高さまで来ると、まず常念が見え、続いて穂高、槍、と現れてきた。新雪の穂高は見事だった。まるで僕等に向かって惜しみなくその胸をさらけ出している風だ。額田さんは手頃の岩の上にカメラを据えて、望遠写真、赤

外写真、と撮影に夢中になる。

位ヶ原^{くらい}まで登ると、南アルプスの全容が見えてくる。白峰^{しらね}三山から塩見、悪沢^{わるさわ}、赤石、と手に取るように見える。当の乗鞍岳は三つの峰を並べて始終僕等の行手^{ゆくて}に聳え立っている。左端の主峰にある巨大な岩が白い雪の上に落としている影が、大きく目立つ。山稜にはあちこちに雪煙りが渦巻いているのが見える。

もうこのあたりから雪は吹き払われて堅くなって、波のようなスカブラをなしている。それを踏んで肩ノ小屋へ着くと、一足前に出た山川君が待っていた。小屋は半ぶん雪に埋まっている。直ぐ薪^{まき}に石油をかけて火を起こしにかかったが、湿っていてなかなか燃えつかぬ。そこへ頼んでおいた人夫が上ってきたので火を任せて、僕等は腹をつめた。

アイゼンをしっかりと靴に結びつけ、余計な物を残して身軽に外へ出ると、飛驒^{ひだ}側から吹きつける風が面もあげられぬくらいきびしい。石原君が先頭に立って頂上目がけて登り始める。ザクリザクリとアイゼンの齒が凍^いてついた雪に刺さる音が、久しぶりに冬の高山を踏む緊張した心持にさせる。

遠く加賀の白山^{はくさん}が見える。幾度眺めても美しい山だ。ふりかえると北アルプスがすっかり見えてきた。笠ヶ岳が大きい。そのうしろに立山^{たてやま}、剣^{つるぎ}の連峰から大日岳^{だいにと}まで指摘できた。やがて頂上に着くと、今までその蔭になつて見えなかった御岳^{おんたけ}が、不意にその堂々たる山容を現して眼を驚かせる。乗鞍と相応ずるが如く間近に、ドッシリと座を構えているこの山は、峰々のそそり立つ北・南アルプスの混雑から離れて、独り悠然と孤高を誇っているが如き風貌を示している。おそ

らくわが国で、「聳え立つ」という形容を最も嚴格に規定すれば、それに一番あてはまる山は、富士山については御岳であろう。

海老^{えび}の尻^{しり}っぽのようにピンと横に氷柱^{つらら}を張りめぐらせた頂上の祠^{ほくら}の前に立って、貪^{むさぼ}るように山を眺めた。御岳と白山との間には、限りもなく向こうまで山並^{やまなみ}が続いている。石原君があらまし眼で数えただけでも十四重もあった。その一番向こうの遙かな山並を、鈴鹿山脈だろうかなどと話しあった。ここにして飛驒こそ真の山の国、という感が深い。目立つ高い山はないが、見る限り山また山の重なりである。

悠然と孤高を誇っていると言え、御岳のほかには白山がある。古い地理書に、富士、御岳、白山、を日本三名山に数えているが（一説には御岳の代わりに立山）高さにおいてはかなり劣る白山がかくも信奉されているのは、その美しい山の姿のためであろう。ことに北アルプスの諸峰から遙かに望んだ白山には、誰しも一種の神々^{こうこう}しさを感じるに違いない。

その白山に見惚れていると、傍の山川君が、「僕の故郷はあの山の裏ですよ」と言う。白山の裏なら僕の郷里でもあるので「どこですか、加賀？ 能登？」と尋ねると、「加賀です」という答。「加賀のどこ？」「大聖寺^{だいしょうじ}という町です」——偶然なこともあるものだ。僕は冬の乗鞍の頂上で、故郷の山を眺めながら同郷の人に逢ったわけだ。山川君のお祖父さんは大聖寺藩の士だったそうである。

撮影を済まして頂上を辞す。帰りは早くたちまち肩ノ小屋まで降りてしまう。小屋では人夫が豪勢な炭火を起こして待っていた。今夜はここで泊まるつもりで人夫に来て貰ったのだけれど、

とても寒そうなので冷泉まで降^{くだ}ることにする。途中、富士見岳の真下のスロープの良い所で一あそびして、冷泉の小屋へ戻ったのは四時過ぎだった。

その翌日、雲はあるが晴れた。午前中昨日あそんだ所まで滑りに出かける。さすが石原君は見事な滑降ぶりだ。昨夜炬燵を囲んで遅くまでの話に、スキーの真の面白さが分かるのは、始めてから七シーズン目だという彼の説であったが、やはりみっちりと年期を入れてこそあんなに巧^{うま}くなるのであろう。二シーズンや三シーズン行たくらいで、スキーが上手^{じょうず}にならないと言って歎く手はないのである。

昼近くまであそんで小屋へ戻って来た。荷をまとめて帰途に就^つく。今度は鈴蘭小屋までの半分の所までスキーで降りた。そこでスキーをぬいで、あとから追いかけてきた人夫に背負^おつて貰い、僕等は心のどかにフラリフラリ歩いて行った。雪の多い時ならこの上の尾根筋を、鈴蘭まで一気に滑って降りてしまうそうだ。

ふり返ると、雲の流れの切れ目に時どき乗鞍が頭を出した。僕等は一本の白樺^{しらかば}の根元に置いてあった腰かけに尻をおろして、昨日登ったばかりの山頂を倦^あかず眺めた。

鈴蘭小屋へ着いて遅い昼飯に、熊の肉を御馳走になった。熊の肉を食べさせるから帰りには是非腹を空かせて降りて来るよう、行きしなにここの若主人から言われていたのだ。熊肉のスキ焼き鍋^{かまど}に舌鼓^{したつづみ}を打っていると、土間ヘドヤドヤと七、八人の獵師がはいって来た。何でも昨日から熊を追いかけていたのだが、とうとう見失ってしまったと残念そうに話をする。随分大きい奴だ